



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

愛媛の高校生と まちづくり

私が高校を受験したのは今から58年も前の昭和36年でした。その頃(昭和36年)の高校進学率は51.3%で、私の同級生も例外ではなく半数ほどの生徒は進学せず、長男や自営業者は農業や漁業などの稼業を継いだり、兄弟姉妹の多い家では進学をあきらめ、高度成長前期だったこともあって中卒就職者は、「金の卵」ともてはやされ、集団就職臨時列車に乗った多くの田舎育ちの少年少女が、東京や京阪神を目指して旅立ちました。間もなく日本全体が高度成長期を迎え、進学率はうなぎ登りです。上昇を続け、昭和49年には90%を超え、その後緩やかな横ばいを続けながら、現在は96.5%となり、1950年に約1割程度だった大学進学率も現在では57.6%となるなど、高学歴化の目立つ社会となりました。

た。

私たちの身の回りにある高校は今、少子化による生徒数減少がもたらす学校存続という、かつてない荒波にもまれています。その地域から高校がなくなると、地域の過疎や高齢化に拍車がかかるだけでなく、地域が疲弊してしまうという危機感から、PTAや同窓会などが中心になって、地元中学生が地元高校に進学するよう働きかけたり、学校存続を訴える署名活動が盛んに行われてきました。その熱意ある運動の甲斐もなく、特に地方の高校の生徒数の確保は深刻の度を増しています。

高校に進学する中学生は自分の行きたい学校を選ぶ場合、自分の能力を勘案して合格しそうな学校を、先生や親と相談しながら最後は自分も納得して決めますが、選ぶ基準は①大学受験のための勉強中心の学校、②スポーツ等の部活を中心にした学校、③地域密着型の学校、④職業訓練型の学校とおおよそ4つに分類されるようです。高校の進学率は限りなく100%に近い現代なので、希望通り合格する確率は高く、努力さえすれば大学や専門学校への進学も可能なので、頑張つて欲しいものです。

さて最近県内の高校がオンリーワンの

特徴ある学校に、随分様変わりをはじめているようです。かつて高校生は煙草を飲んだり、暴力をふるったり悪ふざけをするような、暗いイメージが少なからずありました。ところが最近の高校生はとても真面目で、地域の活性化の一翼を担ったり、中には国内外で賞に輝き活躍する者まで現れ、その様子が新聞やテレビで毎日のように紹介されている姿は実に頼もしい限りです。私は長年地域づくりに携わっていますが、その現場で高校生と出会う機会が俄然多くなってきました。一昨年は上浮穴高校のクロモジプロジェクトに加わった生徒と一緒に討論をしました。地域づくり人顔負けの感性の鋭さに驚かされました。

高校生のそうした取り組み実態を知るべく、県教委から①「地域を担う心豊かな高校生育成事業」と②「地域に生きる地域とともに歩む高校生育成事業」という2つの事業資料を貰いました。①は地域活性化に貢献する体験活動や交流活動を通して、他者を思いやる心を育み、②は魅力ある学校づくりが目的です。①の29年度地域活性化プロジェクトに取り組んだ学校は、新居浜東「スポーツで地域を健康にするプロジェクト」、今治北大三島「大三島魅力再発見プロジェクト」、松山中央「地